

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月7日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720062

研究課題名（和文） 「ツアー・パフォーマンス」の独自性と意義——調査と分析による解明

研究課題名（英文） Originality and Significance of “Tour Performance” : Research and Theoretical Analysis

研究代表者

田中 均 (TANAKA HITOSHI)

大阪大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：60510683

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の現代芸術の新しい傾向としての「ツアー・パフォーマンス」の事例を調査し分析を行った。明らかになったのは、(1)受容者の能動的な参加を促す点で「関係性の芸術」との比較が可能だが、ユートピア的な社会関係の形成を試みるというよりも、受容者個人の単独性や私的記憶について自省的な経験を促す傾向が強いこと、(2)近年では、人々の声が収集されるアーカイブとしての性格が強いことであり、これらの特徴は日本社会における芸術の位置づけという文脈から理解できる。

研究成果の概要（英文）： This research project has investigated a new trend in Japanese contemporary performing arts known as “tour performances.” The results consist in following points: (1) On the one hand, “tour performances” may be comparable with “relational art” insofar as they prompt active participation on the side of audience, but they stimulate, on the other hand, spectator’s reflection on his/her singularity and private memory: (2) “Tour performances” have become in recent years archival projects collecting “voices” of people than tour in urban spaces. These tendencies are to be understood in Japanese context of art and society.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：美学・芸術理論

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：都市空間と芸術、芸術における参加、パフォーマンス

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象である「ツアー・パフォーマンス」(以下 TP)は、日本の演劇ユニット PortB が、自らの行う公演の呼称として創作したジャンル名であり、彼らは 2006 年から現在に至るまで、東京を中心として TP 公演を行っている。

研究開始当初の時点で確認された TP の基

本的な特徴は、都市空間の中を観客自身が移動しながら、指定された訪問地に設置された視覚的・聴覚的な演出を体験し、それを通じて都市の過去について想像するというものである。代表的な事例として、池袋周辺地域を舞台として戦争の記憶と戦犯追悼の問題を取りあげた《サンシャイン 62》(2008 年)、その改訂版《サンシャイン 63》(2009 年)が挙げられる。

理論的な関心から見ると、TPには現代芸術に関わるいくつかの重要な問題が見て取れる。すなわち、上演への観客の参加、歴史の記憶・記録の展示、風景の経験、都市空間における私的なものと公共的なものの境界などである。しかし、研究開始当初、TPはまだ日の浅い上演形態であったため、各公演の批評や紹介、および、演出家の高山明氏によるコンセプトの提示はあっても、TPを一つのジャンルとして捉え独自性を分析した研究は見られなかった。

研究代表者は、一貫して美学史における芸術(家)と社会との関係についての研究に従事してきたが、本研究を通じて、現代芸術、とりわけ上演芸術における、芸術とその「外部」との関係性を分析し、それを通じて芸術と社会との関係を理論的に明らかにすることを目指した。この場合「外部」とは、第一に、芸術家の創造によらない諸要素の上演への導入であり、具体的には既存のテキストや証言の引用、専門的俳優でない演者の起用、劇場外での上演などである。第二に、上演と観客との相互作用の問題であり、この場合は観客の参加のあり方が分析対象となる。

こうした関心から応募者はTPの先駆性に注目し、高山氏が山口情報芸術センターにおいて行った長期ワークショップに参加して、その成果としてのTP公演《山口市営P》(2008年)の制作過程を経験した。また応募者は2008年以降のTP公演(東京)、および関連するインスタレーション(東京、ソウル、取手)、フォーラム(横浜)を網羅的に調査した。その間、2008年度には山口大学人文学部の研究プロジェクト経費による補助を受け、2009年度には山口大学若手研究者支援経費による補助を受けた。

研究成果の一部は美学会西部会研究発表会(2009年)において発表し、TPのジャンルとしての特徴について「インスタレーション」、「ツアー」、「パフォーマンス」の観点を提示した。さらに、TPの制作過程における、芸術家とワークショップ参加者、地域住民の相互関係に着目した論考を共著『アート・ポリティクス』(2010年)に寄稿した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、研究期間内の調査と収集した資料に基づいてTPというジャンルの独自性を解明することであった。具体的には、上記の論点(観客の参加、記憶・記録の展示、風景の経験、都市空間における私的/公的なもの)に関して、現代演劇および現代美術との関係におけるTPの位置づけを示すことが目指された。

本研究の目的には以下の二点も含まれた。すなわち、個々の公演を相互に比較し、各上

演地域の特徴を考慮に入れつつ、TPの通時的な変容・深化の過程を明らかにすること、さらに、同時代の類似した事例、とりわけドイツ語圏で展開しているドキュメンタリー演劇との比較を通じて、日本においてTPが行われることの意義を示すことである。

3. 研究の方法

TPのジャンルとしての独自性と意義を解明する本研究の方法は主に二つに分けられる。TP公演、および関連するインスタレーション等を調査すること、および、調査結果を分析し、成果を発表することである。

(1) 調査に関しては、日本国内だけではなく、海外、具体的にはオーストリアのウィーン芸術週間における公演も含まれた。

研究開始当初は、公演それ自体のみならず制作過程も調査の対象とする計画であったが、制作者との信頼関係の点を考慮して計画を修正し、それに代えて、制作者へのインタビュー、および制作者(下記研究協力者のうち、高山明氏と林立騎氏)をゲストとする公開のフォーラム、講演会を開催した。

(2) 分析に関しては、研究開始当初は特に、現代演劇に関する近年の理論的枠組み、例えば、「ポストドラマ演劇」(H=T・レーマン)および「パフォーマンスの美学」(E・F=リヒテ)を適用することを計画していたが、研究を進める過程において、次の「研究成果」において述べるように、むしろ、現代芸術における観客参加をめぐる、美術批評および美学理論のうちに、より有効な枠組みが求められることが明らかになった。

また、分析のための適切な理論的枠組みを得る上で広い視野を確保するため、研究期間中一貫して、カイ・ファン・アイケルス氏(研究協力者、ベルリン自由大学研究員)の助言を受けた。氏の研究テーマは、パフォーマンス、政治、経済における人々の集合と運動であり、本研究について最も適切な助言者であった。

研究成果の発表には、下記「主な発表論文等」に挙げる論文、図書の他に、上記の公開のフォーラム・講演会を活用した。

4. 研究成果

(1) 公演の調査

研究期間中には以下の公演・展示の調査を行った。2010年度は《個室都市京都》(kyoto experiment)および《完全避難マニュアル東京版》(フェスティバル・トーキョー(以下F/T))、2011年度は《個室都市ウィーン》

(ウィーン芸術週間) および《国民投票プロジェクト》(F/T)、2012年度は、《国民投票プロジェクト》東北ツアーの一部、《光のないⅡ》(F/T) および、展示《3・11とアーティスト：進行形の記録》(水戸芸術館)である。

ただし《完全避難マニュアル 東京版》と《国民投票プロジェクト》は、開催期間が長期に渡ったため、網羅的な調査には至らなかった。

《個室都市京都》および《個室都市ウィーン》は、2009年の《個室都市東京》に基づいている。《個室都市東京》の形式は、池袋西口公園を通過・滞在する人々へのインタビューを、個室ビデオ店を模倣した空間において観客が単独で視聴し、その後のツアーにおいて今度は観客自身が、映像でインタビューを受けていた出演者から逆にインタビューを受けるといったものである。《個室都市京都》および《個室都市ウィーン》では、それぞれの都市でのインタビュー記録と独自のツアーが加えられ、どちらの場合も、公演が行われる都市とは別の都市の現在時(京都の場合は大阪あいりん地区であり、ウィーンの場合は震災と原発事故後の東京)について想像することを観客に促す性格を持っていた。

ある都市において別の都市・地域を想像する枠組みは、《光のないⅡ》でも用いられ、東日本大震災と原発事故についての報道写真とその再現、エルフリーデ・イェリネクの戯曲、いわき市の女子高校生によるその朗読を通じて、東京の新橋駅周辺において、福島県の被災地への旅行を仮想的に行うものであった(この公演については、下記「主な発表論文等」のうち批評「到来し、過ぎ去る「わたしたち」」で分析した)。

また《国民投票プロジェクト》の場合、観客は、東京の各地を巡回する保冷車の中の区切られたブースで、福島県と東京都の中学生に「希望」について尋ねたインタビューを視聴し、その後、自らの記憶についてのアンケートを「投票」する。これは東京と福島という二つの地域を想像によって結びつけるほかに、中学生にとっての未来と、観客個人の少年期の記憶という、二つの時間の方向性を交錯させるものだった。

以上の公演の事例からは、ちょうど本研究の開始のころから、PortBの公演形式に大きな変化があったことが理解される。つまり、従来のTPの観客が、都市空間の過去という時間的距離について想像するのに対して、上記の事例では主として、人々が発する声を収集するアーカイブの制作とその展示がなされており、観客はこのアーカイブにアクセスすることによって、空間的距離について想像を促されるのである。

(2) 制作者とのフォーラム・講演会

2012年度には、「メディアとしての演劇の可能性—ツアー・パフォーマンスをめぐるフォーラム」(11月)、および講演会「演劇における言語の問題—翻訳者の課題」(3月)をどちらも大阪大学で、研究代表者の司会のもと開催した。

前者のフォーラムでは、高山明氏によるこれまでのPortBのプロジェクトのプレゼンテーション、および、木ノ下智恵子氏(大阪大学コミュニケーション・デザインセンター特任准教授)と高山氏による対談が行われた。その際には、これまで東京を中心として開催されたTPについて、関西におけるプロジェクトの可能性について議論されたほか、近年のプロジェクトにおいて「声を集める」ことが中心的主題であることが確認された。

これに関連して研究代表者は、「テアトロクラティア」(劇場政)の概念から近年のTPを解釈する可能性を提起した。これは、プラトン『法律』に由来し、ニーチェ『ワグナーの場合』、ベンヤミン『叙事演劇について』において批判的に言及され、近年ではサミュエル・ウェーバー『媒体としての演劇性』で主題的に論じられている概念であり、集団としての観客の非理性的・情動的な反応が、芸術及び政治の指導者が与える規範を動揺させ変革することを指す。TPを理解する上でこの概念が有効である理由は、インタビューや戯曲の朗読として収集される声を聞く経験においては、理性的に把握される言葉の意味よりも、言い淀みや微妙な抑揚など「声の肌理」が重要な役割を果たしており、そのような細部には、個人のうちに内面化された社会的規範と、それに対する違和感とが看取できるからである。もう一つの理由は、TPでの声の収集と展示において、確かに制作者による厳密な演出がなされているが、観賞者は聞こえてくる声に触発されて自らの個人的な記憶を自由に想起するため、作品の意図や意味といったものに収斂することなく情動が喚起されることにある。

2013年3月の講演会では、《光のないⅡ》の翻訳者であり演劇研究者である林立騎氏が、イェリネクの演劇言語において、対話の可能性が疑問に付されていること、また様々な文学的・哲学的テキストの断片の集積からなることを指摘し、こうした上演困難なテキストとの取り組みの事例として、ヨッシン・ヴィーラー、アイナー・シュレーフによる演出の事例を紹介した。また氏は上演の可能性として、上記の《光のないⅡ》上演を取り挙げ、都市空間に対する感覚的知覚が更新される経験、および、芸術経験における受動性の意義の再評価について議論を展開した。

この議論と(1)の調査の成果を関連づけるならば、現在地から隔たった別の場所を想像する観客が、二つの場所を重ね合わせることによって、現在地の風景に対する美的経験が成立すると言える。

(3) 分析のための理論的枠組み

「研究の方法」でも述べたように、研究開始当初は理論的分析の枠組みとして、「ポストドラマ演劇」および「パフォーマンスの美学」を想定していたが、研究過程においてその枠組みが適当ではないとの結論に至った。

その点については、2010年の第18回国際美学会議での発表で論じた。この発表では、《サンシャイン 63》を事例として取り挙げ、「パフォーマンスの美学」における、観客と演者のエネルギーのフィードバック・ループのモデルの適用可能性について考察した。その結果確認されたのは、TPでは観客と演者、あるいは演者相互のフィードバックが生じるというよりも、ツアーで体験される視覚的・聴覚的演出に触発されて、(観客が協力してツアーしている場合でさえ)個人の内省と、単独性の強められた経験が生じるということである。

この傾向は、近年のTPにおいて、インタビューや録音音声、観客が個室や個別のブースにおいて、あるいはイヤホンを介したラジオ音声を通じて、単独で視聴する形式が取られるために、いっそう強まっている。こうした事態を理解するためには、「ポストドラマ演劇」の概念もまた適切とはいえない。

一見すると観客と演者、観客相互のコミュニケーションが生じるかのように見えるTPにおける、観客の単独性の経験について分析するため、研究代表者は、ニコラ・ブリーの提唱する「関係性の美学」、およびそれに対する美術批評および美学理論からの批判を参照することとした。ブリーは、日常的な社会関係を美術作品のうちに引用することで、それをユートピア的なものへと変容させる現代美術の潮流を「関係性の芸術」と呼んだ。

TPでも、《完全避難マニュアル 東京版》(観客が、東京の山手線の各駅の付近にある、人々が集まり居住する場所(シェアハウス、モスク等)を訪問する)にはそのような「関係性の芸術」のモデルが有効であると言えるが、その他の事例を分析する上で重要なのは、むしろそれを批判する、美術批評ではクレア・ビショップ、美学理論ではジャック・ランシエールの議論である。研究代表者は、下記「主な発表論文等」のうち図書『批評理論と社会理論<1>:アイステーシス』に掲載された論考「芸術における「解放」とは何か」において、ビショップとランシエールの所説

を比較し、観賞者個々人の経験の多様性を論じる上ではランシエールの議論がより有効であると結論した。「関係性の美学」においてユートピア的なものとされる作品内の社会関係が、実はアート業界内部のなれ合いではないかと批判するビショップの場合、芸術家個人の創造性が評価の尺度として重視されるため、観客の経験のあり方は必ずしも正当に評価されず、作品に参加する観客は集合的存在として捉えられるにとどまっている。

これに対してランシエールは、著書『解放された観客』(2008年)において、芸術家による観賞者の教育という関係を、観賞者の「愚鈍化」として批判する立場から、芸術家による表現を観賞者個々人が自由に翻訳して自らの表現へと変容させる「知的冒険」を、観客の「解放」として規定しているのである。

さらに、他にも、「関係性の美学」に対して批判的であり、TPの分析のモデルとして有効であると考えられる議論が見出された。それは、美術史家クリスティーン・ロスが「脱関与の美学」という名称のもと展開している議論である。彼女は、現代の資本主義において、誰もが創造的であり、他者とネットワークを結ぶことが要求されるなかで、そのような要求に適応することの困難に由来する疲労と抑うつ現象が広がっていることを指摘し、それを踏まえて、個人の内面への沈潜、孤独と休息が主題化された美術作品を分析している(こうした社会状況と芸術との関係については、下記「主な発表論文等」のうち研究紹介「社会的/精神的エコロジーと芸術」において論じた)。こうした現代美術の傾向のうちに、TPもまた位置づけられることが確認された。

(4) 海外の事例との比較

海外の事例との比較については、その一部を、下記「主な発表論文等」のうち論文「ロマン主義的アイロニーのアクチュアリティ」において発表した。この論文では、特に実例としてドイツ・スイスの演出家グループ、リミニ・プロトコルによる《ヴァレンシュタイン——ドキュメンタリー的演出》(2005年)を取りあげ、その特徴を解明するため、現代ドイツの哲学者クリストフ・メンケの悲劇論との比較を試みた。近代悲劇を「美的なもの」として理解するメンケの議論は、「美的なもの」と「実践的なもの」の分割に基づく以上、両者の境界が不分明となる「ドキュメンタリー演劇」を捉えることはできないが、メンケの議論が依拠しているロマン主義的アイロニーの概念は、18世紀末に成立したものであるにもかかわらず、それを精緻に理解するならば、ドキュメンタリー演劇の構造の理解に資するものであることを指摘した。

この論考では、ドキュメンタリー演劇の上演の多層的な構造として、出演者が自身の関心に基づいて個人史を語るという層、演出家が出演者の証言を編集して作品の主題を提示するという層、および、観賞者が出演者の言語行為を過去についての証言あるいはフィクションとしてではなく、現実への遂行的な働きかけとして理解しようとする層、この三つの層の複合を指摘した。このモデルは、TPにおける多様な声の収集と展示、および観賞者によるその受容を分析する際にも応用可能である。

しかし、リミニ・プロトコルのその後のプロジェクト、とりわけ、《100%ベルリン》(2009年)《100%ウィーン》(2010年)など、特定の都市の住民の性別・年齢・居住地域の統計的分布を反映した100人が出演して自らを紹介するというプロジェクトでは、上記のような各層の複合性を見てとることはできず、むしろ、都市共同体の調和が演出され、出演者も観賞者もそれに自己同一化するという現象が見られた。

観賞者の「参加」という観点から点で他に重要な海外の事例として、ドイツのグループ「リグナ」による「ラジオバレエ」が挙げられる。研究代表者は「ラジオバレエ」についてのカイ・ファン・アイケルス氏の論考「集会の手前で」を翻訳し、その解説を執筆した(未発表)。「ラジオバレエ」は、ハンブルク駅構内のように、再開発によって商業化されたために、規制が強化された公共空間において、禁止された行為(露天や物乞い)の身振りを模した「バレエ」を集団で行うというものであり、公共空間の規定を流動化させることが目指されている。この「バレエ」では、参加者が簡単な身振りを身につけることで、空間に課された規制を攪乱する能力を得るとされており、これは、先述のランシエールが論じた観客の解放の一つの実例であると言える。

「ラジオバレエ」が、公共空間において集団で展開されるのに対して、TPでは、繰り返し述べてきたように、個人の単独性の経験や私的記憶の想起が重視される。この点は、「脱関与の美学」との関連で先述したように、日本に限らずグローバルな現代資本主義を背景としている面がある一方で、日本社会という文脈においてTPが展開されることの意義という側面からも理解できる。というのも、高山氏が《国民投票プロジェクト》について述べているように(『始まりの対話』思潮社、2012年)、日本において、政治的問題を明示的に主題化する芸術が社会的有効性を持つことが困難であるという事態を踏まえて、TPは、パフォーマンスが展開する場所を、人々の議論が行われる公的空間として規定するのではなく、むしろ私的経験の場所として規

定し、そのような迂回路を取ることで逆説的に、私的な記憶や振る舞いのうちに政治的なものの痕跡を見出すよう観客に促している。すでに触れたように、TPではインタビューの「声の肌理」を通じて、内面化された社会的規範とそれへの違和感が、観賞者の自己省察において想像されるのである。TPの独自性と意義として、研究代表者は以上の結論に至った。

(5) 研究成果の国内外における位置づけとインパクト

TPについてその通時的な展開を概観する研究はすでに存在している(例えば、萩原健氏の論考“The City as Stage, the Audience as Performer: “Tour-Performances” by the performance group Port B in Tokyo” Comparative Theater Review 11(1) 69-80 2012)が、「関係性の美学」をめぐる美術批評・美学理論における論争状況にTPを位置づけ、あるいは西洋哲学・美学の伝統に由来する「テアトロクラティア」の概念の現代的意義をTPのうちに見出す点は、本研究独自のものであり、その点でこの研究は、演劇理論、現代美術、美学理論など複数の研究分野へ貢献するものである。

また、ドイツ語圏の事例と比較することを通じて、日本においてTPが展開されることの意義を論じる、といった点も、本研究独自のものであり、その点でこの研究は、日本の現代の上演芸術に関心を持つ海外の研究者にとっても、参照する意義のある研究であると言える。

(6) 研究の今後の展望

本研究では、公演の調査にも注力したが、芸術における参加の問題を分析するための理論的枠組みを得ることが最も困難かつ重要な課題であった。本研究を受け継いで、今後は、芸術における参加の問題一般を、美学・美術理論・演劇理論等の観点からさらに探究することが必要と考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

田中均、ロマン主義的アイロニーのアクチュアリティー——現代演劇の事例に即して、西日本哲学年報、査読有、第18号、(2010)、15-35

<http://petit.lib.yamaguchi-u.ac.jp/G0000006y2j2/file/17827/20110322182602/2010010427.pdf>

〔学会発表〕（計1件）

TANAKA, Hitoshi, “Tour Performances” :
The New Trend of Japanese Contemporary
Performing Arts, The 18th International
Congress of Aesthetics, 2010. 8. 13, 北
京大学（中国）

〔図書〕（計1件）

田中均、御茶の水書房、批評理論と社会理論
〈1〉アイステーシス、(2011)、15-40

〔その他〕

○批評

田中均、到来し、過ぎ去る「わたしたち」—
—エルフリーデ・イエリネク三作連続上演に
ついて、現代詩手帖、2013年4月号、(2013)、
120-123

○研究紹介

田中均、社会的／精神的エコロジーと芸術、
山口大学環境保全、第27号、(2011)、21-24

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 均 (TANAKA HITOSHI)
大阪大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：60510683

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

高山 明 (TAKAYAMA AKIRA)
演出家 (PortB)

林 立騎 (HAYASHI TATSUKI)
演劇研究者・翻訳者

カイ・ファン・アイケルス (KAI VAN EIKELS)
ベルリン自由大学研究員